

12 月



撮影：2006 年 12 月（アリゾナ州 グランド・キャニオン国立公園にて）



あの日のあの川 リレー日記 ～第 34 話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 34 話主人公 田川未来也

（筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類 4 年 白川（直）研究室『川と人』ゼミ）

（□川ガール・■川系男子）

（出身地を流れる川：群馬県 利根川水系鍋川）

「絶景に魅せられて」

いつのこと？： 小学校 5 年

どこの川？： コロラド川（アメリカ合衆国）

正直に申し上げますと、2 年前にこの研究室に入るまで、私は川というものに関心をもったことはなかった。川との関わりがあったとすれば、台風などで大雨が降ると川の水がどれだけ増えただろうか、と面白半分に親が運転する車の後部座席から地元の鍋川を眺めることはあった。また、家から少し離れたところに三途川という小さな川があり、遊びに出かけるときは何度もその川を渡って行き来したぐらいのものだ。言うまでもなく危ない命知らずな少年である。そんな私が、この研究室に入る以前に一度だけ、ある川に対して「川ってすげえな」と思ったことがあった。それが、かの有名なグランド・キャニオン、そしてその一帯の絶景を長い年月をかけて生み出した、コロラド川である。

幼少期、父親の仕事の関係でアメリカ合衆国に住んでいたころ、旅行でグランド・キャニオン国立公園とその周辺一帯に連れていってもらった。グランド・キャニオンがどれほど雄大であるかという話は、私がここで書くよりも、『地球の〇き方』などの旅行のガイドブックなどの方が詳細に書かれているかと思うので、ここでは割愛し、私が川に対して何を感じたということを中心に述べさせていただく。当然私もアメリカ随一の国立公園が誇る絶景には感動したが、このときは不思議とコロラド川という川そのものに対する興味もあったのだ。

私が住んでいたカリフォルニア州のサンディエゴという街は、上水道の取水源がコロラド川であった。水道から出る水は、海外には多い硬水の例に漏れることなく、そのうえ少し内陸部に行けば砂漠が広がるという環境もあってなのか、カルシウム分を多く含んでいたことは今でも鮮明に記憶している。そのまま飲めば胃袋の中で骨ができるのではないか、と思ったほどである。当時は上水道設備やら排水管やら貯水槽に発想がいたることもなく、このとんでもない悪質な水を供給している川はどんなモノなのか、という良いのか悪いのか分か

らないきっかけで、コロラド川に対する興味が芽生えたのだ。

上述したとおり、コロラド川は水源こそロッキー山脈にあるが、大部分が砂漠の中を流れる川である。あくまで想像であるが、途中で合流してくるような支流もほとんどないうえ、乾燥した砂漠地帯でどんどん水が蒸発してしまうだろう。それでいて私が住んでいたサンディエゴだけでなく、アメリカ第二の都市ロサンゼルス水道も担っていたのだから、いろいろな意味で日本とは比べ物にならないスケールの川であるということは想像できた。だが、実際初めて川を眺めた時は、そのようなスケールの大きさは不思議と感じられなかった。そもそも谷底のコロラド川の水面までは標高差が裕に2000m以上あり、流れがどれほどのものかなど、肉眼では見えるわけがない。夏場であれば、谷底まで下るツアーなどもあるのだが、訪れた時は冬の始めだったこともあり、谷底まで見学することは叶わなかった。だが、どれほどの量の水がどれほどの速さで流れているのかわからない、そんな川が何億年もの月日をかけて目の前に広がる絶景をつくり出したのだ。川そのものは至って穏やかに見える。でも目の前には荒々しく削られた岩の渓谷が広がっている。一本の川が、赤岩の広がる大地の真ん中を切り裂くように流れ続け、この景色ができた。その過程はどれだけ頭で考えても自分には想像に至らないであろう。この川は何億年も前から、同じ場所を流れ続け、人間が生まれるよりもはるか昔からこの大地を見続けてきている。そして、そこに生命があったことの証を、川が流れ続けてくれることによって、私たちの目で確かめることができる。川を一つの生き物に例えるのはおかしい話だが、それができてしまいそうなのがコロラド川だった。当時の私の語彙力では「すげえ」としか表現できなかった（悲しいことに今もそうであろう）。だが間違いなく、その言葉の中には川に対する畏敬のようなものがあつたと、いま振り返って改めて思う。

水泳、サッカー、テニス、ちょっと陸上…今までいろいろなスポーツをつまみ食いしてきた私が行きついた先が登山である。高校時代から始めたのだが、何で山を始めたのかよく聞かれることがある。命知らずなバカ、という本質的な部分が変わってないからに他ならないのだが、そんなことを話すと周りから人が遠ざかっていく（気がする）ので、「小さい頃、祖母に連れていってもらったりしたから、それがあってかな」などとそれっぽいことを言っている。だが、登山を始めて一つ気付いたことがあつた。自分の、自然が作り出す景色を見る目が肥えていることである。身体のものであり、それ以外の部分はどこも肥えていないのに、目だけ肥えてしまったのだ。その原因の筆頭が、コロラド川が作り出した景色なのは間違いないと思う。

それゆえに、普通の人々が気軽にはいけないうちで絶景が見たい、という思いが人一倍強くなってしまった。その一心が私に、学生という立場でありながら登山>>>>山に行くお金稼ぎのためのバイト>>学業という生活を送らせている。おかげで昨年、今年と2年連続して、かねてから憧れていたヨーロッパに足を運ぶことができた。山があるところには必ず川がある。ヨーロッパの登山拠点になる町に滞在すれば、必ず町の中を、氷河を水源とする独特の水の色をした川が流れている。町を散策するとき、自然と川沿いへと歩を進めるようになってしまったことが、この研究室に入ったことの何よりの証であろう。だが、川を見る目が多少変わった今もなお、コロラド川ほど魅せられた川には国内外問わず、出会ったことがない。それほど、言葉では言い表すことのできない凄み、そして奥深さが、コロラド川からは感じられた。

この先の人生、一度でいいからコロラド川よりも引き込まれる川、そしてその川が作り出す絶景に出会ってから本物の三途の川を渡りたいものである。



ホースシュー・ベンドにてコロラド川を見下ろす

(次号は2月号にて南波さんにバトンを託します)